号外
日本と中国
Japan and China Friendship Newspaper
昭和42年2月6日第三種郵便物認可/発行/公益社団法人日本中国友好協会
飯田地域版／編集：飯田日中友好協会／会長：清水可晴
飯田日中のニュース 2019年 3月号 第308号

http://www.mis.janis.or.jp/~nihao-iida/

3月の予定

2.9.23日ﾋﾟｰｽﾗﾎﾞ冬季連続講座/満蒙開拓記念館
5日(火) 阿智村帰国者サロン教室/阿智村公民館
11日(月) 満蒙開拓平和記念館雲影委員会/満蒙開拓平和記念
14日(木) 豊丘帰国者サロン教室/豊丘村はつらつ
14日(木)飯田日中役員打ち合わせ会/飯田市
15日(金) 飯田市帰国者交流会/飯田市砂払温泉
18日(月) 小さな世界都市ＩＩＤＡ地峡村実行委員会/飯田市
24日(日) 小さな世界都市ＩＩＤＡ地峡村/飯田市風越子供の森公園

◎ 冬期連続講座２３日に、若干余裕があります。申込み下さい。

日　時：３月２３日　（土）　午後２時～３時半
会　場：満蒙開拓平和記念館
テーマ：いま、戦争の記憶の継承とへ諏訪の意味を考える
　　　—　平和ミュージアムの役割　—
講　師：安斎科学・平和事務所所長　案斎育郎氏

先月2月の活動日誌

3日(日) 中国帰国者への理解を深める県民のつどい/長野市
8日(金) 長野県日中友好協会女性委員会新春のつどい/長野市
23.24日　**日中友好スキー交流会/木島平スキー場**
26日(火) 阿智村帰国者サロン教室新年会/阿智村公民館

満蒙レポート
満蒙開拓への道を開いた角田一郎

山形県大郷村（現在山形市）出身の陸軍中佐「角田一郎」は、大正十四年八月に病のため予備役（後に退役）に編入されて、山形県の郷里に帰って来ていた。この角田一郎は明治十五（一八八二）年に生れ、陸軍士官学校第十六期卒業生で、日露戦争に出征し、その後、静岡、豊橋等の連隊に勤務、シベリヤ出兵にも参加していて、満州東北部を調査したことがあった。そのとき満洲の無限の沃野が未墾のまま放置されていることを見ていた。

昭和六年になって満洲事変が勃発し、翌年の満州国建国へ動き出すと、角田は以前から練っていた満州移民の構想を具体化した。これは満州に日本農民を移植し、開拓させることは、国防的観点から見ても、また満州国育成から見ても、更には、狭隘な耕地と失業苦に悩む日本農村の進路としても最も有望であると説き、さし当って現地の治安状況に鑑み、既教育在郷軍人五百名を一集団とする武装農業移民を送出させるべく、「満蒙経営大綱」としてまとめた。後に満蒙開拓事業の先駆けとなる「集団武装移民案」の根幹になる構想案であった（長野県満洲開拓史総編」七七頁参照）。その具体的行動について『山形県立上山農業高等学校五十年史（昭三七発行）』及び『山形県立図書館調査資料角田一郎と加藤完治の交流』によれば、角田は、昭和七（一九三二）年一月一日茨城県の日本国民高等学校に加藤校長を訪ね、これを具申した。加藤校長は大いに共鳴し、角田と同道して翌二日、角田と同じ士官学校時代の同期生であった陸軍大臣荒木貞夫を官邸に訪問し、政府の事業として実施すべきことを要請した。

陸相は「満州武装移民」の実施は困難と主張したが、加藤・角田両人の力説の結果、陸相も政府に進言する旨答えた。桑島節郎著『満州武装移民』によると「武装移民」を語る上で欠かすことのできない人物として、角田一郎を挙げ、彼は東宮鉄男、加藤完治と同じく、早くから「満州移民」実現のため奔走したが、二人の陰にかくれてほとんど知られていないという。角田は昭和七年一月二日の荒木陸相会見後、東京にとどまり、在京陸士同期生主催の「板垣大佐歓迎会」に出席。板垣に「満州移民即時断行」を荒木陸相に進言してくれるよう頼んでいる。荒木は「努力する」旨板垣に返答し角田から突破口が開かれたという連絡を受けた加藤は早速活動を開始した。加藤は、関東軍参謀板垣大佐および参謀石原莞爾中佐（山形県出身、後に中将）が農業移民を支持しているという情報に基づき、加藤、石黒農林次官、宗光彦公主嶺農事試験場長の三名で角田の「武装移民案」を基礎に「満蒙植民事業計画書」（六千人移民案）を作成し、政府への即時断行の要請を行った。加藤は直ちに満州に渡り関東軍の参謀石原莞爾の斡旋を受け、北満の三江省樺川県方面に入植地の目安を得て帰国。

さっそく武装移民の募集に着手した。具体的に東北六県並びに長野、新潟等の寒冷地から五百名の在郷軍人を募り、これを山形県大高根、岩手県六原の両道場、及び友部国民高等学校で訓練、更に奉天郊外北大営に訓練所を設けて一部を派遣訓練。昭和七〈一九三二〉年十月三日第一次武装農業移民四九二名が神戸港を出港し、三江省樺川県永豊鎮に入植した（入植式八年二月一一日）。これが我が国における満洲開拓団の先駆をなした「第一次武装農業移民」であり、その後「第一次弥栄村開拓団」と称した。続いて昭和八（一九三三）年七月二五日には、第二次として樺川県の湖南営に入植させ、入植後は「第二次千振開拓団」と称した。更に第三次として、昭和九〈一九三四〉年十一月三日、北安省綏稜県北大溝に入植、入植後は「第三次瑞穂村開拓団」と称して、三ケ年にわたって既教育在郷軍人による、「試険武装農業移民」が送りだされた。

この武装移民は成功したとされ後に（昭和一一年八月）、「二十年間一〇〇万戸移住」が国策として遂行された。しかし、武装移民導入には、反満抗日救国隊等よる襲撃を受け大量の離脱者や死者を出していた（土竜山事件）。

一方、「山形県立自治講習所」は、昭和八（一九三三）三月廃止され、同年四月「山形県立国民高等学校（校長西垣喜代次）」が設立され、その主要な教育方針として拓殖教育を受け継いだ。山形県は、朝鮮農業移民政策、又満蒙開拓移民政策の、発祥の地ともいわれ、その後、国策の名の下に、大陸への大量農業移民の送出へと突き進んで行った。

以上『レポート山形県史から学ぶ』より。

（文責小林勝人）　完

＊　＊　＊

小冊子『レポート山形県史から学ぶ』は記念館にあります。

～ともに学び合うために～満蒙開拓平和記念館　新館「セミナー棟」建設基金にご協力をお願いします

◎すでに大勢の会員の皆様にご協力いただいておりますことに感謝いたします。これからご協力いただける方は持ちの振込取扱票（赤色用紙）」にてお願いします。振込取扱票がない場合は、下記事務局まで。
◎ 一口５０００円を目標としますが、ご協力いただける範囲で結構です。
新館セミナー棟の断面図は飯田日中ニュース８月号をご覧ください（お問合せ先　飯田日中事務局池田 090-4094-2084）